

慶應義塾大学 日吉キャンパス 特色GP だより

no. 8

>>> 慶應義塾大学日吉キャンパス 特色 GP

平成 17 年度特色ある教育支援プログラ

ムで選定された「文系学生への実験を重視

した自然科学教育」は、慶應義塾大学日

吉キャンパスに在籍する文系 4 学部(文・

経済・法・商)の学生を対象とする実験

重視の自然科学教育を実践する取組です。

この便りでは、取組の活動状況をお知らせ

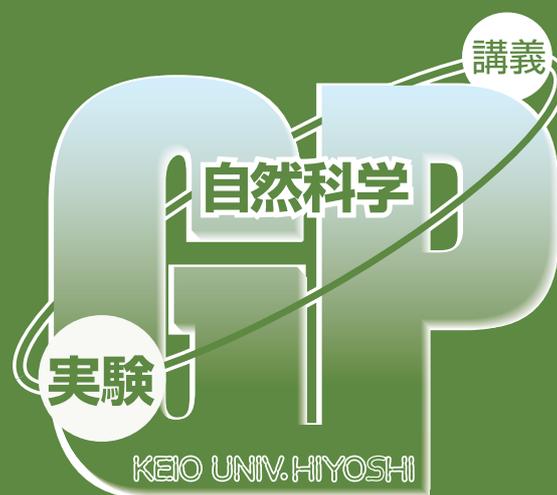
します。

●大学基準協会の実地調査の報告

商学部 表 實

2007年12月5日、大学基準協会による日吉特色GPの実地調査が行われた。当日は、基準協会から、吉田文氏(メディア教育開発センター教授)、佐々木雄太氏(愛知県立大学長)、勝信樹氏・山口好美氏(大学基準協会)の4名、日吉特色GPから青木健一郎経済学部教授(物理)、大場茂文学部教授(化学)、福澤利彦商学部教授(生物)、富山優一部長(日吉学事センター)、湯川哲史課長(日吉学事センター)、野村美夏係主任(日吉学事センター)に、表 實(GP事業推進責任者)の7名が出席した。調査は、9時から30分間調査委員間の打ち合わせ、9時30分から11時過ぎまで調査委員と日吉特色GP出席者間の質疑応答、その後20分ほど化学・物理・生物の順で文系学生の実験風景視察の順で行われた。実験風景視察終了後、実験を含む科目を履修している学生5名に対するインタビューを約20分持ち、最後に再び基準協会側と日吉特色GP出席者による質疑応答があり、12時に実地調査が終了した。

基準協会と日吉特色GPの質疑応答は、冒頭で吉田教授から「この調査は、文科省の外部資金使用状況に関する監査とは異なるもので、幾つかのGPを対象としてその取り組み内容に関する進捗状況を調べ、この事業に対する文科省および基準協会の今後の取り組み方針の参考にするものであり、ご協力を頂きたい」との言葉で始まり、事前に送られてきた基準協会の質問事項に対して日吉特色GPが用意した回答書を説明する形式で進められた。質問内容は、1) 実施プロセスについて、2) 組織性について、3) 有効性について、4) 将来展望について、5) 補助金について、6) 特色GPに選定されたことの効果について、7) その他、であり、各事項についてさらに細かい質問が列記されたものであった。これらの各質問に関して、日吉特色GPの取り組み状況を説明し、最後に「教育の質の向上を目指す事業は、GP事業のように期限を切った取組、および競争的な環境の取り組みでは、適切ではないのではないか」という見解の表明で終了した。



● (日吉・矢上) 特色 GP 合同シンポジウム報告書

商学部 表 實

2007年12月15日(土)、日吉キャンパスの来往舎シンポジウムスペースにおいて、慶應義塾大学(日吉・矢上)特色GP合同シンポジウム「自然科学教育における慶應義塾大学の挑戦」が開催された。このシンポジウムは、日吉特色GPにとっては3回目のシンポジウムとして、また矢上(理工学部)特色GPにとっては本年度が4年間の最終年度にあたることからその成果報告を兼ねたものとして、それぞれの位置付けをもつものである。

シンポジウムは2部構成からなり、安西祐一郎塾長の開会の挨拶の後、第一部では福澤利彦商学部教授による「日吉特色GPの取組の理念とその実現に向けて」、および大森浩充理工学部教授による「矢上特色GPの取組の理念とその実現に向けて」の、二つの特色GPからの報告があり、その後北城恪太郎氏(日本アイ・ビー・エム株式会社最高顧問:経済同友会終身幹事)による基調講演「慶應義塾大学の自然科学教育に関する期待」が行われた。

第二部では、塾外からの招待者:井上卓己氏(文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長)、北城恪太郎氏(上記)、関根勉氏(東北大学高等教育推進センター教授)、中西茂氏(読売新聞東京本社編集委員「教育ルネッサンス」取材班デスク)の4氏(50音順)に、日吉特色GPからの青木健一郎経済学部教授と矢上特色GPからの伊藤公平理工学部教授を加えた計6名の方をパネリストとして、パネルディスカッション「自然科学教育における慶應義塾大学の挑戦」が行われた。2時間弱の時間であったが、6名のパネリストの議論に会場からの発言も多く出され、自然科学教育および教養教育のあり方について様々な観点からの意見交換がなされた。最後に、西村太良教育担当理事による閉会の挨拶でシンポジウムを終了した。

なお、当日の参加者総数は75名(講演者・招待参加者4名;他大学関係10名;高校関係6名;企業関係5名;慶應義塾関係50名)であった。その他シンポジウムの詳細については、特色GPのホームページおよび「合同シンポジウム報告書」をご参照いただきたい。

● 寄稿:「矢上特色GP幹事から」

(日吉・矢上) 特色 GP 合同シンポジウム報告

理工学部 大森 浩充

(日吉・矢上)特色GP合同シンポジウム「自然科学教育における慶應義塾大学の挑戦」が、2007年12月15日、日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにおいて、75名の参加者を集めて開催された。私は、矢上特色GPの幹事として、本イベントに関係することができたので、本シンポジウム開催までの過程について、思い出しながら書いてみたい。

表先生との事前協議が始まったのは、開催よりも一年以上も前の2006年9月6日のことである。主旨、テーマ名、形態・位置づけ、シンポジウムの想定参加者、日程、会場、印刷物、広報(ポスター、チラシ、HP)、予算、内容、今後の進め方について、その時、考えられるすべてのことについて、表先生の居室で1時間近く協議したことを覚えている。その後もう一度の事前協議を経て、各特色GPから選抜された代表者による「(日吉・矢上)特色GP合同シンポジウムのためのWG」が発足し、第1回の会合が開かれたのは2006年11月2日である。それから第9回2007年10月19日まで協議が重ねられ、その後も数度の事務局会議を経て、当日12月15日の開催となった。

本合同シンポジウムをお祭りや広報イベントとして位置づけるのではなく、しっかりと内容討論をする場とすること、我々が実施してきた教育について外部から忌憚りの無い意見を伺う機会とすること、そして、それぞれの特色GPの個別内容だけのシンポジウムは望むところではなく「1+1が3以上となる」ことを目指そうということ、この3点についてはすぐに両特色GPの合意を得ることができた。しかし、実際のテーマ設定については、長く時間を割いた



議論が必要であった。文系学生の理系教育、理系学生の文系教育などの提案を経て、最終的に「自然科学教育における慶應義塾大学の挑戦」というテーマで、基調講演、パネル討論を行うこととなった。この点は、矢上においても自然科学教育の重要性の再認識があったことと理解している。

他学部の教職員と顔見知りとなり、教育について語り合うことができ、協力し達成感を共有できたことは、本合同シンポジウムの最大の実績である。このような連携は是非今後も続けていきたい。また、松澤美千子（日吉特色 GP）、中村真久（矢上特色 GP）両氏のご苦勞なしには本合同シンポジウムは開催できなかった。この場を借りて、心から感謝申し上げる次第である。

●平成 20 年度開講「実践自然科学」の紹介

商学部 福澤 利彦

日吉キャンパス特色 GP 事業 1 で検討されてきた新科目「実践自然科学－実験要素を含む 4 年生のための自然科学－」が、平成 20 年度秋学期に三田キャンパスで開講される。この科目の特徴は、実験やデモンストレーションなど、実験要素を取り入れて、文系専門課程学生（4 年生）に、自然科学の考え方や方法論を教えることである。学生にとっては、積極的に授業に参加し、自ら考えることが求められる。開講初年度となる平成 20 年度では、化学（大場茂）・物理学（小林宏充）・生物学（福澤利彦）の 3 分野の教員が共同して、それぞれの分野において、4 回ずつ異なるテーマで授業を行うことを予定している。授業で扱う具体的なテーマは以下の通りである。

- ・化学分野（比重、燃料電池、スペクトルと光の作用、キラリティ）
- ・物理学分野（カオス、フラクタル、セルオートマトン、イジング模型）
- ・生物学分野（遺伝子と遺伝、味覚の生物学、視覚の生物学、生物の行動）

●早稲田大学オープン教育センターを見学して（平成 20 年 2 月 28 日）

文学部 大場 茂

他大学調査の一環として、今回は早稲田大学オープン教育センターを訪問した。西早稲田キャンパスの大隈会館会議室にて、早稲田大学側 8 名（内、教員 4 名）と慶應義塾大学側 8 名（教員 6 名）とで自然科学教育に関連した双方の取組みを紹介し、意見交換を行った。また、6 号館の学生実験室を見学した。以下はその報告である。

- (1) オープン教育センター（以下、センターと略称）は 2000 年に設置された。当初は 1、2 年生を対象として教養教育を主に扱っていたが、現在は全学年を対象として学際的な領域も含むものへと発展した。設置科目数は 2007 年度において約 3,000 であり、他大学（学習院大学等）との単位互換交流によるものが 1/3、各学部からの科目提供が 1/3、センターの独自設置科目が 1/3 である。ただし、自然科学については 17 科目だけであり、2008 年度から理工学系の科目を増やす予定。この中に文系学生対象の実験科目も含まれる。
- (2) センターに登録されている科目はオープン科目とよばれ、全学部の学生が履修できる。そして所属学部の、卒業に必要な単位として認められる。インターネットを利用したオンデマンド授業などは履修希望者が多いので、履修制限をかけるために志望理由書を提出させる。
- (3) 2007 年度から、テーマスタディ（全学共通副専攻）が開始された。これはセンター科目を特定の分野について体系的に学び、20 単位取得すると修了認定する制度である。
- (4) センターには専任の助教が 3 名、職員が 8 名、この他に兼任の教職員がいる。（実験科目担当の職員 5 名は教育学部と兼務）。
- (5) 1949 年新制大学発足当初は、文科系学生にとって自然科学は必修であった。しかし、その後のカリキュラム改定により必修でなくなり、履修者数が減少した。
- (6) 6 号館の学生実験室（物理、生物、地学、化学）は、教育学部の専門科目と文科系学部設置の一般教育科目と共用で使っている。実験科目は 1 クラス定員 40～50 名である。

1 コマ 90 分で実験科目を実施し、しかも複数のカリキュラムに対応させるために化学実験の準備に苦勞しているという話が印象に残った。

特色 GP 関連会議記録

2007 年 10 月から 2008 年 2 月に行われた特色 GP 関連会議の報告事項および協議事項は下記の通り。

●日吉キャンパス特色 GP 会議記録

11 月 13 日（火）

- ・特別研究教員（生物学教室：発信事業）の紹介
- ・日吉・矢上特色 GP 合同シンポジウムワーキンググループ現状報告
- ・平成 19 年度 10 月度予算執行状況の確認
- ・次年度の事業報告について
- ・大学基準協会からの実地調査について
- ・生協からの物品購入方法について

12 月 18 日（火）

- ・日吉・矢上特色 GP 合同シンポジウムの総括
 - ・次年度の事業計画および予算案について
 - ・平成 19 年度 11 月度予算執行状況の確認
 - ・大学基準協会からの実地調査報告
 - ・組織立ち上げについて
- 2 月 12 日（火）
- ・平成 20 年度調書提出報告
 - ・平成 20 年度特色 GP 特別研究教員公募審査報告
 - ・平成 19 年度予算執行状況の確認

●事業 1 ワーキンググループ 会議記録

11 月 29 日（木）

- ・「実践自然科学」新設に関する各学部の状況報告
- ・平成 19 年度事業推進費の用途について

- ・次年度の事業および予算案について

今後の予定・お知らせ

- 平成 20 年 1 月 16 日、平成 20 年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書を提出し、3 月 3 日、文部科学省より交付決定通知を受諾した。
- 平成 20 年度生物学教室特色 GP 発信事業および植物関連の特別研究教員公募を行った。
多数の応募者の中から 2 名の方に決定し、来年度 4 月より勤務予定である。

事務局より

平成 17 年に採択された本取組も、いよいよ来年度で最終年度を迎えることとなりました。4 年間の集大成として、これまでの 3 年間の成果を結実させ、かつ次の発展に結び付くような活動ができる年にしたいと思います。今後とも各方面からのご支援やご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

お気づきの点などございましたら、事務局までご連絡ください。

慶應義塾大学日吉キャンパス特色 GP 事務局

Tel: 045-566-1316 (内線: 33533)

E-mail: gp-sci@phys-h.keio.ac.jp

<http://www.sci.keio.ac.jp/gp/>



生物実験風景